

下條尚志著

## 『国家の「余白」——メコンデルタ 生き残りの社会史——』

京都大学学術出版会 2021年 570ページ

しんたに はるの  
新谷春乃

## I はじめに

本書は2015年に京都大学へ提出された博士論文を大幅に加筆・修正したものであり、序論を含め5部構成、全14章(序章と終章を含む)から成る大部である。著者は、従来長期調査が拒まれてきたメコンデルタの一村落で2年以上にわたる住み込み調査を実施するとともに、長期調査終了後もベトナムやカンボジアを頻りに訪れ、「可能な限り広域的な観点から」、調査地である「フータン社<sup>(注1)</sup>という地域を捉える」(22ページ)試みを続けてきた。その集大成である本書は長期調査により培った信頼関係のうえで得られた語りの宝庫であり、非常に貴重な民族誌となっている。より一般的には、戦争や政治経済的混乱など「動乱」を経験した社会において人々がとった生存維持戦略を国家の「余白」という「空間」に焦点を当てて考察した研究書として、ベトナムやカンボジアの研究者にとどまらない幅広い読者を獲得しうる意欲的著作である。

## II 本書の構成と概要

序論では、研究目的や先行研究、調査地域の概要が示されている。序章は、本書の背景、意義、ねらいや研究方法、重要タームの説明がなされている。本書によると、国家の「余白」とは、「長期にわたり国家のなかに組み込まれてきたにもかかわらず、為政者にとって常に捉えどころがなく、それゆえに統治のモデルを描きにくい場」(5ページ)、つまり

「国家の介入しにくい空間」(6ページ)である。脱植民地期から社会主義改造期にかけての動乱下ベトナム南部の個々の地域社会の状況が、これまでの研究で十分論じられてこなかったという研究背景のもと、動乱をグローバルな現象ではなく、社会統合または分断をもたらした現象によって大きな変化への適応を迫られた人々の生存に焦点を当てて再検討するとともに、国家が確立しようとした秩序がいかに脆く、ローカルな秩序がいかにこの地域で強固であったかを明らかにするという意義が示されている。第1章では、モラル・エコノミー、多民族社会とその歴史の捉え方、国家の介入しにくい空間、国境を越えた人々の移動、社会国家関係といった観点からベトナム南部を対象とした先行研究の問題点を指摘し、従来の議論を乗り越える新たな見方の必要性を論じている。第2章では、調査地域であるソクチャン省フータン社の社会について、「混血」(ライ)という概念に着目し、混血的な多民族社会を生成してきた地域の特徴と言語・宗教の混血的な状況を説明している。

第1部は、19世紀半ばまで国家の周縁部であったソクチャンという地域が植民地化と脱植民地化によって経験した変化についてフータン社に着目して検討している。第3章では、先行研究や植民地期の地誌を用いて、植民地化以前のソクチャンが複数の国家、政治勢力の周縁部であったこと、19世紀半ば以降の植民地化による農業開発の進展により、在来住民と移民の接触が増え民族的混濁が顕著に進んだことを示している。第4章では、20世紀半ばに新たに南ベトナム国家の一部となったメコンデルタにおいて生じたクメール人の言語・仏教・帰属の問題を考察し、1920年代から僧侶を介してカンボジアと結びついていた上座仏教とクメール語教育が独立後に国家の管理下におかれ、そのことへの抵抗運動が広がったことを指摘する。

第2部は、ベトナム戦争下における国家による統治と抗争し合う2つの勢力の狭間に置かれた人々の生き残り策を検討している。第5章では、南ベトナム政府のジエム政権とティエウ政権が、解放戦線に対抗するために実施した農地・農村改革をフータン社に焦点を当てて検討しており、改革によって、国家がメコンデルタを捕捉しやすい空間へ転換させようと試み、農村内の従来の人間関係を変化させたと

指摘する。第6章では、南ベトナム政府と解放戦線という2つの政治権力間の戦争が、地域社会に及ぼした影響を検討し、両勢力ともに少数民族・仏教の擁護を掲げ、民心の掌握を競い合っていたが、戦況悪化にともない、兵力や食糧、税の動員へと目的が推移したことを指摘した。第7章は、2つの政治権力間の抗争が激化する中、政治権力が介入しにくいさまざまな空間を人々が利用することで戦火を避け、生き残りに奔走するようになったことを指摘した。

第3部は、終戦後、南北を統一した共産党政府による社会主義改造が地域社会に与えた影響と、その統治下での人々の生存戦略を検討している。第8章では、共産党政府による社会主義改造や、カンボジアとの国境紛争、中越戦争による社会経済的変動や宗教と民族の再編について検討し、社会主義改造によって従来の人間関係が解体され、戦時下においてクメール人と華人に疑いの目が向けられるようになったと指摘した。第9章では、社会主義改造下の人々が、家屋、精米所、闇市、寺院といった国家の介入しにくいさまざまな空間を利用して生存確保に奔走し、社会主義改造によって解体されつつあった従来の人間関係を再編成してゆく過程を検討している。第10章では、ベトナム戦争終結から20世紀末にかけてのカンボジアへの越境者に焦点を当て、生活に困窮した人々が脆弱な住民管理、国境線管理をかいぐって難民または労働者としてカンボジアやタイへ移動したこと、カンボジア和平後は出稼ぎ先としてプノンペンへ移動していたことを指摘した。

第4部は、現在カンボジアやベトナム社会のなかで生きる人々が、過去の経験をもとにいかなる国家との関係や、多民族社会における差異認識を抱いているのかを検討している。第11章では、21世紀以降における越境移動の傾向変化とカンボジアから流入する越境者やモノに対する国家の統治を検討し、ベトナム政府による近年の越境者管理強化がクメール人という民族や上座仏教の諸問題を再び顕在化させていることを指摘した。第12章では、フータン社というミクロな空間で生じてきた人間の流入の経験を踏まえ、混淆的な多民族社会の人々が生成してきた、自己と他者に対する差異の認識を検討している。終章では、本書全体の結論として、フータン社というミクロな民族混淆的な地域社会において、住民と国家の間の齟齬、軋轢、折衝の過程で展開さ

れた人々の生き残り策が、脱植民地化以降にベトナム南部で生じた動乱の拡大と収束にどのようにかわっていたのかという問いへの見解が示されている。

### III 本書の意義と疑問点

評者はカンボジア現代史を専門とする地域研究者であるため、本書において国家の「余白」の1つを構成するカンボジアとの関係、そして比較の対象として意義を述べたのち、疑問点・今後の研究課題を3点簡潔に指摘する。

本書の意義は、第1にカンボジア・南ベトナムの社会間関係に関する貴重な研究という点である。関係が悪化した1960年代のカンボジア・南ベトナム関係をめぐっては、国家間の国境紛争に関して両国の現代史研究のなかで散見されるものの、カンボジアと南ベトナムの社会同士がどのような関係を築いていたのかという点を検討した研究は、本書を除いて管見の限りほとんどみられない。本書のなかで、1960年代後半のカンボジアにおいて南北を問わず「ベトナム国籍者」が「共産主義者」、「ベトナム人」と批判されていたと推察されているが(284ページ)、両国の上座仏教寺院間の関係はこの批判に収斂されないクメール人コミュニティによる社会的結びつきがあったことの証左となるだろう。

第2に、本書では国家の「余白」を形成する越境移動先であったカンボジアにおけるメコンデルタ出身のクメール人(クメール・クロム)の営みも詳細な聞き取り調査によって実証的に検討されている。本書でも度々言及されたソン・ゴク・タン(1908年生、チャヴィン省出身)をはじめとして、ソン・サン(1911年生、両親がチャヴィン省出身)、ロン・ノル(1913年生、祖父がタイニン省出身)、イエン・サリ(1929年生、チャヴィン省出身)など、カンボジア現代史上の著名なナショナリストや政治指導者のなかにクメール・クロムまたは両親や祖父母がクメール・クロムの者は多数いる[Corfield and Summers 2003; Kiernan 2004]。ほかにも、著名なクメール人歴史家トラン・ギア(1937年生、バクリエウ省出身)もクメール・クロムであり[トラン2007]、メコンデルタ出身のクメール・クロムの知識人も近現代のカンボジア社会のなかで活躍してきた。このようにカンボジア現代史上、クメール・ク

ロムは重要な役割を果たしてきたが、その一方でカンボジア国内に居住するクメール・クロムに関する研究は驚くほど少ない。そのなかで本書はカンボジアに暮らしていたクメール・クロムたちの貴重な記録という側面ももつ。

第3に、本書で示された動乱下における国家の「余白」というテーマは、内戦、ボル・ポト時代の圧政、社会主義建設など激動の動乱を経験したカンボジアのみならず、戦争や政治経済の変動を経験したさまざまな社会において、オーラルヒストリー調査を通してぜひ取り組まれるべき重要な比較の視座を提示している。カンボジア研究においては、佐藤 [2020, 167-168] も指摘するように、動乱の時代を知る世代の高齢化に鑑みても、その調査が急がれる。

以上、本書の意義を述べてきたが、つぎにその意義と関連した疑問点・今後の研究の課題を示したい。

### 1. 上座仏教を介した南ベトナムとカンボジアの社会的結びつき

本書では、オーラルヒストリーの語りの背景として、国家レベルの「大きな歴史」や公文書などを用いて丁寧に語りの妥当性が検討されており、そのことが語りの信頼性の担保となっている。そのなかで、上座仏教僧侶の留学に関するカンボジア・南ベトナムの国家社会関係についての情報が少ないことが気になった。1960年代、国境画定問題や米軍・南ベトナム軍による国境地域の攻撃、南ベトナムにおけるクメール人や上座仏教徒の扱いをめぐるカンボジアと南ベトナムの外交関係が最悪の状態にあった中、フータン社からカンボジアへ「制度的」留学をした僧侶の語りを取り上げられている (283～284ページ)。最悪の外交関係のなかで、カンボジアへ留学できた背景とは何であったのか。とくに1963年8月、カンボジアは南ベトナムに対して、国境侵犯、ジエム政権の仏教徒弾圧および南ベトナム在住クメール人迫害を理由として政治関係を断絶している<sup>(註2)</sup> [高橋 1972, 48]。国交断絶下であっても、上座仏教寺院ベースのつながりは継続され、「制度的」な人的交流が可能であったということか。もしそうだとすれば、断交理由との関係で、上座仏教徒やメコンデルタ在住のクメール人がカンボジアへ逃れて来ることが許容されており、僧侶の「制度的」留学は国家によって黙認されていたということだろうか。

また、「制度的」留学というのは、1990年代のように国家が「許可した」留学 (449ページ) とは別物なのか。ボル・ポト時代後のカンボジアの仏教復興において、メコンデルタのクメール人僧侶が重要な役割を果たしたことは既存の研究でも指摘されてきたが、ボル・ポト時代以前に両地域の仏教寺院がどのような関係を構築してきたのかという点に関する実証的な研究は管見の限りほぼない。南ベトナム時代のメコンデルタとカンボジアとの上座仏教を介した社会的繋がりについて、両地域をフィールドとしている著者によるさらなる研究に期待したい。

### 2. カンボジア国内のメコンデルタ出身のクメール人

前述の通り、1960年代後半にクメール・クロムがカンボジアに居住できなくなった理由として、著者は民族帰属意識にかかわらず、南ベトナム国籍者という点で、「ベトナム人」、「共産主義者」と疑われた可能性がある<sup>(註2)</sup>と推論しているが (284ページ)、クメール・クロムはカンボジアにいるときに、自らをどう認識し、どう振る舞っていたのか、また周りはどう認識していたのか、その歴史的説明が本書のなかで乏しい。このことは、カンボジアに暮らすクメール・クロムに関する研究の少なさが原因だと思われるが、すでにカンボジア国内でクメール・クロムの研究を展開されている著者による今後の研究成果に期待したい。

### 3. 比較の射程

最後に比較の射程について述べたい。本書のなかで、メコンデルタの社会主義改造に対する比較として、度々カンボジアのボル・ポト時代 (1975～1979年) に言及しているが (65～66ページ, 379ページ)、比較の時間的射程を広げてはどうか。本書でも説明されているように、ボル・ポト政権による「生活空間への国家の浸透を徹底する社会主義政策」(65ページ)のもとでは、国家の「余白」が生み出される余地はほとんどなかったと思われる。しかし、続く人民革命党政権による社会主義建設においては、ボル・ポト時代の悪夢の経験から、国家や社会に対する介入を人々が極度に警戒しており、それを人民革命党政権も認識していたため [古田 1991, 162]、社会への介入に慎重になり、政策からの逸脱を黙認

していた。このことは、人民革命党政権期における農村の再編に関する研究〔小林 2011〕や女性の生存戦略に関する研究〔佐藤 2020〕で指摘されている。極端な例としてボル・ポト時代と比較するだけではなく、カンボジアにおいて似たような「余白」が生じた時代も比較の対象として扱ってはどうか。

以上、カンボジア研究の立場から本書の意義や疑問点を提示したが、本書はベトナムやクメール人といった関係領域の研究者以外にとっても大変示唆に富んでおり、動乱下における人々の営みや国家社会関係を研究するさまざまな地域の専門家に読まれるべき必読書になるだろう。

(注1)「社」は行政村を指す(8ページ)。

(注2) 本書のなかで米国との国交断絶を1964年と記述しているが(284ページ)、断交は1965年の間違いではないか。1964年というのは、恐らく引用元であるChandler〔2008, 236〕の記述をそのまま記載したものと考えられる。

### 文献リスト

#### 〈日本語文献〉

- 小林知 2011. 『カンボジア村落世界の再生』 京都大学学術出版会.  
 佐藤奈穂 2020. 「ボル・ポト時代後の内戦下における女性たちの生計戦略——カンボジア・シェムリアップ

市を事例として——」 瀬戸裕之・河野泰之編『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略——避難民・女性・少数民族・投降者からの視点——』 明石書店.

高橋保 1972. 『カンボジア現代政治の分析』 日本国際問題研究所.

古田元夫 1991. 『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命中のエスニシティ——』 大月書店.

#### 〈英語文献〉

- Chandler, David P. 2008. *A History of Cambodia, Fourth Edition*. Chiang Mai : Silkworm Books.  
 Corfield, Justin, and Laura Summers 2003. *Historical Dictionary of Cambodia*. Lanham, Maryland and Oxford: The Scarecrow Press, Inc.  
 Kiernan, Ben 2004. *How Pol Pot Came to Power: Colonialism, Nationalism, and Communism in Cambodia, 1930-1975*. New Haven and London: Yale University Press.

#### 〈クメール語文献〉

- トラン・ブンチャロン 2007. 『地獄のオンカー』 プノンベン : アンコール.

(アジア経済研究所地域研究センター)